


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）家島 考一 

前近代の中東イスラーム社会、とくに衣食住問題への歴史的接近の難しさは、年代記・地理書・旅行記類以外に拠るべき具体的な基本資料（史料）を欠いているからである。本論文の主テーマは、14世紀のマムルーク朝時代に著されたと推定される著者不詳の『日常食物誌』をその他の関連する「アラブ料理書」や歴史資料と読み合わせながら、食文化の総合的研究を進めることによって、新しい観点から中東イスラーム社会史を描くことである。

本論文はこうした問題意識にたって、まず中東を中心としたイスラームの食文化に関する先行研究を整理・批判する作業から出発している。この先行研究に対する分析と批判の結論として、食文化に関する本格的な研究には「アラブ料理書」という新しい史料群に注目すべきことを強調する。本論文の著者は、記録史料に書名のみ残り、現在は散逸した「アラブ料理書」、現存されているが写本のままであるもの及びすでに校訂・出版されている「アラブ料理書」を丹念に調査・収集して、一つの独立した史料群（ジャンル）としての「アラブ料理書」の構成・内容・系統性について分析する。とくに8種類の「アラブ料理書」が現存することを突き止め、一部写本を含めてそれらすべてを収集し、記載内容を概観するとともに、各書の系統性を詳細に論じている。結論において、現存する8種類の料理書は、その構成方法の違いによって、料理名称ごとに構成された料理書、料理範疇（酸味料理、詰め物料理など）に分けられた料理書、食材別に構成された料理書、の3つのタイプに分類できることが指摘されている。また「アラブ料理書」は、その記載内容の比較・分析によって、ワラーク（al-Warrāq）系統、バグダーディー（al-Baghdādī）系統、13世紀に成立の『おいしい料理と香料』（著者不詳）系統、マグリブ・アンダルス系統、の4つの系統があることを分析する。

序章の最後の部分では、「アラブ料理書」が編纂された時代背景について論じる。著者の見解によると、アッバース朝盛期から11世紀にかけて編纂された料理書は宮廷の文人たちやカリフの側近の人たちの手によって記録されたもので、宮廷や富裕者層の奢侈趣味や健康維持（薬膳）への志向が強く反映しているが、13世紀以降の料理書は、書き手及び書かれた目的も大きく異なっている。しかし、この結論は具体的史料に基づいてなされたものではなく、あくまでも著者による推論を含めた一般論に過ぎないため、説得力に欠ける。この点について、複数の審査委員から、さらに十分な資料（史料）的裏付けが必要であるとの批判が出された。

料)、とくに研究目的に沿った写本・文書史料を忍耐をもって検索・発掘し、それを緻密に読み解いていく、いわば根本史料に基づく実証研究にある、と考えている。本論文の著者は、この指導方針に従って「アラブ料理書」の発掘とその史料校訂の研究に挑戦した。3年間という限られた短い期間内に、自らの研究課題に沿った未発見資料を探しだし、それを正確に読み説くことは不可能に近い仕事であるに違いない。しかも写本の一語一語を正確に読み解いていくためには、膨大な傍証史料とも比較・検討する必要がある。この点で筆者が並々ならぬ努力をされたことは十分に認められよう。しかし、本論文の中心部分を占める第2部の第2章「『日常食物誌』のアラビア語テキスト」の部分には不正確な読み、未解読部分や不注意による脱落部分など、いくつかの欠点が見出される。これらの欠点は論文の著者の研究者としての資質の問題ではなく、あくまでも時間的な制約によるものであって、今後さらに地道に研究を続けていくことで、より一層完成度の高いものになると思われる。

「アラブ料理書」という新しい史料群に注目し、その関連文献を広く渉猟することで史料的系統性と内容を総合的に検証・分析したことは、今後の研究者にとっても新しい研究の方向性を示唆したものとして意義が高い。また、未校訂のアラビア語写本『日常食物誌』をイスタンブルのトプカプ宮殿図書館で自ら検索・発掘し、写本(手稿本)の校訂・分析という極めて困難な、しかも忍耐力のいる仕事に対して大胆に挑戦し、一応の成果を収めた点においても、博士号を授与するにふさわしいものと判断する。